

◆【海員随想】行ってみたいところと住んでみたいところ② 海員OB 及川帆彦

メラネシア族だが、性質は温和でよく働く。われわれ乗組員の居住区には近づこうともしない。居住区にも無遠慮に入ってきて、盗みを働いたりする東南アジアの連中とは大違いである。

このニューカレドニア島には、戦前、ニッケル鉱山に多数の日本人が出稼ぎに来ていた。そのためヌーメアには、日本の領事館があったくらいである。それらの人の中には、日本に帰らずにこの島に住みついた人も何人かいた。

その一人に、ヌーメアの街で会う機会があり、郊外の住まいに案内されて話を聞くことができた。当時、もう80歳の老人で、熊本県の出身ということだったが「この島に住みついたのは、気候もよく、美しくて平和な島だから」ということであった。

「犯罪のない島なので、家にかぎをかける必要もない」というのである。フランス人の夫人はすでに他界していたが、娘さんがフランス人と結婚、孫の女の子が2人いて、その家族と一緒に暮らしていた。立派な住宅で、釣りをしたり散歩を楽しんだり、孫たちと遊んだりという、文字通り悠々自適の生活を送っているということだった。なるほどこういうところに住んでいたら、長生きもできるだろうと、その老人をうらやましく思ったものである。

最近のニューカレドニア島は、観光客が増えたりして、多少事情が違ってきているようであるが、平和で美しいという印象は、今も心に強く残っている。

住んでみたいところを、もう一つ挙げるとすれば、それはカナダのバンクーバーである。このバンクーバーには、もう22年前になるが、ケミカル・タンカーで数回入港した。フレーザー川の河口にある港で、南岸に落ち着いた感じの市街が広がっている。

ここにはかなりの数の日本人が住んでいる。以前、カナダ政府が日本人の技術者を募集したことがあり、職業も様々である。大工、機械工、自動車の修理工、理容師など。それにブティックを営んでいる日本人もいるし、日本料理店や鮎屋で働いている人たちもいる。最近になって知ったことであるが、バンクーバーで短歌会という同人誌もあるという。

バンクーバーと聞くと、寒い所という印象を持ちがちだが、実際はそうでもない。海流の影響だろうが、冬でもそれほど寒くはないし、雪も少ない。緯度でいえばフランスのパリよりも少し南である。フレーザー川を少しさかのぼった河岸に、ケミカル工場があり、そこの栈橋に着けた時、その工場働いている日本人がいた。40歳ぐらいの男で、休憩時間に話をする機会があった。

北海道の出身で「バンクーバーには10年前に来た」という。初めは出稼ぎのつもりだったが、ここが気に入ったので住み着くことにしたのだと言う。ここに住んでいた日本人の女性と親しくなり、結婚して子どもも2人いるというのだった。

「カナダというところは、万事おおらかなところだ」と彼は言った。「人間関係もそうだし、生活のリズムもゆったりしているのだ」という。これまで休暇をとって2度北海道に帰ったが、日本人はこせこせというか、せかせかというか、そんな感じがして、日本の社会は窮屈な気がするということであった。「ここにいると、このフレーザー川の流れるように、時間がゆっくり過ぎていくという感じがしますよ」と彼は言った。

外国に住みついている日本人には、このほかにも数人に会う機会があった。アメリカ、シンガポール、オーストラリア、オランダなどである。彼らがそこに住みついたのは、それなりの理由があつたことであるが、その土地が気に入ったということも要因になっていると思う。

「海員だより」